

次の文章はトヨタ自動車の創業者豊田喜一郎の孫であり現社長の章男について記した片山修著の「豊田章男」(東洋経済新報社)の一部である。イチローはアメリカの大リーグなどで活躍した野球選手である。この文章を読んで以下の設問に答えなさい。

今でも社長を続けていられるのは、その悔しさがあるからだ。自分は負け嫌いだと力を込めてこう語る。

「イチローさんと出会ってから、負け嫌いという言葉、ずっと使っています」

負けず嫌いではなく負け嫌いとは、もとはイチローの言葉だ。「①」
な負けず嫌いではなく、「負けて、その悔しさを知っているから嫌い」なのが負け嫌いだと、イチローは言う。章男はその言葉を借り、いまや、さまざまな場面で「負け嫌い」と口にする。

章男は、悔しさをバネに、負け嫌いの本領を発揮して戦い続け、心の葛藤を乗り越えてきた。長年にわたって苦しんだアイデンティティ・クライシスから脱却したのだ。その心のありようについて、イチローに次のように物語った――。

社内のスキー大会が開かれたとき、章男は大会の口火を切るため、最初に滑るように求められた。ゲレンデでの練習に付き合ってくれたのが、ゲストとして招かれていた大日方邦子だ。

チェアスキーヤーで、2006年トリノパラリンピックの大回転の金メダルのほか、数々のメダルを獲得した選手だ。

彼女とリフトに乗る際、章男はハタと困惑した。どのようにサポートすればいいのか。助けなければいけないのかどうかさえ、わからなかった。すると、彼女は、章男の動揺を見透かしたように、サラリと「何もしてくださらなくていいんです」と言った。

章男は、「助けなければ……」と考えること自体が“支援者目線”だと気づかされた。「彼女は“ファイター”として普通に扱ってほしいと考えているんだ」と、深く悟った。

同じような経験は、もう1度あった。2016年リオパラリンピックの視覚障害者マラソンの選手で銀メダルを獲得した道下美里の伴走をする機会があった。すると、目の不自由な彼女がいきなり握手を求めてきた。少しも臆することのない態度に深く感動した。ああ、②彼女らは、ハンディキャップを「個性」として、前面に出して戦っている。

彼はひらめいた。豊田家の御曹司であることが負い目だったが、それは「個性」じゃないか。彼女たちがハンディキャップを「個性」としているのと同じように、3代目は「個性」そのものじゃないかと考えた。発見だった。大きな勇気をもたらした。章男は、イチローにこう語った。

「私は、豊田という名前や3代目というのは、ハンディキャップを背負っているようなものだと思っていた。でも、パラリンピックの選手たちと接したとき、彼らはハンディキャップを前向きに『個性』と捉えていますよね。それを見て、私も名前や立場を『個性』と捉えて生きていけばいいのだと思うようになりました」

第1問 「 ① 」の中を埋めよ。

第2問 下線部②の具体例を、文中の言葉を用いて二つあげよ。(それぞれ 30 字以内)

第3問 あなた自身の「個性」は何か。また、それがもつ負の側面とどのように向き合ってきたか。中学・高校生の時の体験も踏まえつつ述べよ。(350 字以上 400 字以内)